

殿を圍繞せる黒臘色の殿階を設けたる皆同じ。

拜殿 は東北に面し、桁行九間、梁間三間半、柱は皆白地にして、縁に黄金を鏤めたり。殿内は六十三疊にして、中の間は十八疊、正面扉内には徳川家光の木像を安置し、合天井は臘色、格子の内は百間百色、紺地は金の蟠龍を彫刻し、承塵は花鳥を刻して金の彩色を施せり。正面なる破目には金地に獅子を畫き、簷頭には二十四個の鍍金の釣燈をかゝげたり。ことに金色燦爛として、殆ど人目を眩するばかりなるは、中央にかゝげられたる金製の天蓋にして、其下に金梨子地の高机及び三具足の美を盡したるを据ゑたり。

本殿 は方五間半、佛殿造二重屋根にして、其の周圍は朱塗なる欄と黒塗なる椽とを以てこれを透れり。仔細に精巧なる彫刻を見て、更に右の瑞籬を透れば、皇嘉門の龍宮に擬したる門は直ちに眼前にあり。これより十歩、奥の院に至る。

山内及び其附近にて見るべき處少なからず。公園は東照廟の西南、朝陽館の西にあ

りて林泉の美また掬すべきものあり。中央に勝安房の選に成れる晃山の大碑あり。二荒神社の左方、一路の石階の杉樹小暗き門を登れば五六町にして行者堂あり。

日光裏山には、この傍より登る。これより雜木林を分くること十四五町、その木立を出でて、芝生原に達すれば、殺生石は最早遠からず。

瀧の尾 行者堂よりや、下りて二三町の所なり。此地昔は樓閣殿堂山に凭り谷を填めて、鐘鼓の響、讀經の聲殆ど耳も聳するばかりなりしが、今は全く荒廢し盡して、唯權現社一字を留むる而已。石階の傍に一小瀑あり、鏘然として落つ。形、縹糸を練るがごとし。これ白糸の名ある所以か。されど瀑布に富めるこの山中にては、眼を惹くべき程のものにあらず。社背に子種石、泪の泉、三本杉等の勝あり。稻荷川は此東を流れて、潺湲たる水聲は遠く近く杉樹の間を穿ちて聞ゆ。それに沿ひて下れば、産之宮、開山塔を経て、輪王寺の裏に達す。

瀧の尾は今も靈境として尊崇せられ、精進潔齋の僧、蕎麥粉を水にかきて、所謂手一合の苦行を修むるもの

往々にしてあり。遊客、試に祠の傍に罎口のかゝる僧房を窺ひ見よ。其處に清瘦黒衣の僧の姿を認めん。

●外山 日光に遊ぶ人多しと雖も、外山の眺望を説くもの少し。されど其眺望のすぐれたるはこの附近第一と稱すべく、四面の景は皆來りて一眸の中に集る。また其後に凍岩、摺子岩の勝あり。外山に遊ぶには、神橋の傍を日光小學校の前に出で、稻荷川の川原を越え、それより其北岸の榛莽を穿つこと數町、中腹以上は岩石重疊、木根に攀ぢ、石に縋り、纜かにその絶頂に至るを得べし。頂上に一小祠あり。眺望頗る廣濶なりことに女峯の噴火して熔岩を流したる跡は壯觀を極む。此邊春は早蕨多く萌ゆ清遊一日の興なきにあらず。

●霧降瀑 に遊ばんと欲せば、稻荷川を渡り、萩垣面を過ぎ、一溪流を渡りて更に高原に登り、大谷の流域と日光の市街とを前に見、男體、大真名子、小真名子女峰の連峰を後に顧み、更に北して小倉山に至れば、風光宛として京の嵯峨に類し、人をして草を籍き氈を延べて春の日の長きを終るを覺えざらしむ。猶行くこと里許、赤菴山の

東麓に當りて、俄然大瀑布を現出し、其處に二段の一大瀑布を懸く。これ即ち日光三大瀑布の一にして、上段を一の瀧と稱し、下段を二の瀧といふ。望瀑臺はその深谷に臨める南端にありて、仔細に瀑の全景を望み得ると共に、併せて四境の風光を一眸の下に集め、雲烟の悠揚、山嶺の起伏、一々これを指點するを得べし。蓋し此瀑唯一の特色なり。されど瀑の真趣を知らんと欲せば、五町の險を冒して、其瀧壺に下らざるべからず。瀧壺よりは一の瀧は隠れて見えざれども、其瀑流麗にして夏時浴するに堪へたり。一の瀧も其致甚だすぐれたれど、登路險にして容易に登るべからず。霧降瀑は華嚴瀑に比して、其豪宕は及ばず、其瀧洒は或はこれに軼きたり。殊に其眺望と望瀑臺の風情に富めるは、晃山中稀に見る所ならん。望瀑臺の畔に、蓼太の句「くだけては三千丈や瀧の月」を刻せる碑あり。されど此の意味は霧降に適せずして、寧ろ華嚴に適せり。此附近春時、八汐の躑躅頗る多し。此より猶上流に眞黒瀑と稱する一瀑あり。

必ず二三臺休みて美しき都少女ならずは西洋婦人の洋服を長く着流したる姿を見るは此附近の特色なり。

裏見瀑 は此の谷の奥にありて、路は山腹を穿ちて、或は危橋を渡り、或は岩石を越え、その道の窮る處、鏗然として一瀑の懸るを見る。瀑見茶屋はこれに對して敬ち、飛沫雨の如し。瀑の高さ約十五六丈、歩して瀑背に至るを得るを以て有名なりしが、卅五年九月の大風水に山崖崩壊し、瀑形全く變じ、觀背の勝を擅にすること能はずなりぬ。この上流は樹立多く、初音瀑、慈觀瀑なり。後者は形の數條に岐れて落下すると紅葉の多きを以て名あり。又、栗山に通ずる馬立富士見越は此高原を越え、女峯山と小真名子山との間を行く。

中禪寺に赴くには神橋より大谷川の岸に添ひたる新道を行くを普通とすれど、裏見瀑に廻りたる旅客は馬返に直線に出づる捷路を取るべし。即ち裏見入口の茶屋の前なる溪橋を渡り、荒澤の谷の西岸を縫ひ、清瀧村に下れば、中禪寺舊道は其間を東より西に駛りて一つの峠を越ゆれば、馬返に至る。この舊道は今も壞敗して

車を通ざざれど、清瀧村に、清瀧觀音あり。一詣すべし。往昔の清瀧なるものは、既に其の跡をも留めず。而して、大谷川沿岸の新道には、大日堂以西他の奇なし。唯、足尾街道の久次良村より西南に岐る、あるのみ。此の分岐點卅五年の洪水以前には樹立生ひ茂りしが、今は全く川原となれり。

馬返は蕭然たる二三の人家、中に風情ある旅店あり。古風なる力餅を賣るを以て、旅客皆足を佇む。屋前に一小池あり。清淺掬ぶに堪へたり。此家の前いかなる時にも二三の駕籠五六の俵の憩はざるることなし。

深澤 これより溪山一步毎に色を生じ、深澤に至れば、前二荒山の奇岩は落つるがごとく頭上を壓し、溪流又石に激して、山影樹影、一として奇ならざるなし。深澤は日光山中溪流第一の奇勝たるのみならず、本邦に於ても有數なる溪谷なり。丹青山頭上を壓し、支那風の奇石蔽ひ冠りて、水聲四山に反響し、木曾の棧道と雖も亦これに及ばざるの趣あり。紅葉、八汐の美また甚だ有名なり。新道の中央に朝日瀑の半は截断せられたるあり。

かくて深澤の溪橋を渡り、往昔女子のこれより登るを禁じたる女人堂の傍を過ぎ、新舊道の相交れる間を過れば、俄然、

方等般若二瀑の懸れる大谷を開く。大なるを方等とし高さ十二丈、小なる般若と爲し、高さ十丈に過ぎず。此谷は晃山中最も紅葉の美を以て稱せらるゝの地、春の八汐又可なり。舊道の捷きを撰べば是より太平まで登路大凡二十町、其間に中の茶屋あり。不動阪あり。太平は不動阪の上において樹木皆これより觀を異にし、幽寂の氣自ら人に迫る。

華嚴瀑 太平の荒涼寂寞たる空氣を破れるは、この大瀑の深谷に落下する響なり。中禪寺の水、一たび懸崖に逢ひてこゝに全く傾瀉し盡し、その壯大雄麗なる、蓋し宇内無比と言ひても敢て過言にはあらざるべし。瀑見茶屋は山腹にありて斜に偉大なる瀑と對し、下に蚊龍は住むらんと覺しき深奥なる淵と相臨めり。岩頭に岩燕あり、常に水烟の間に翺翔せり。曾て某氏榛莽を刈りて、瀑底に至るの路を開き、鵲の橋を架し

白雲の瀧を懸け、一箇の瀑見茶屋を設けて、以て遊客の至るに供せしも、卅五年九月



の大風雨にこの路全く破壊し、夫修繕を加へざれば又至る能はずなりぬ。(今は修繕成れり。)瀑と對する瀧見茶屋より見れば、瀑の下口は、岩石犬牙相連り、樹木繁茂せる見る。此の落口に、約四疊半位の平地あり。瀑の盆涌して落下するさまを見るべし、藤村操の不可解の記念又此處にあり。瀑頭に小野

湖山の詩を刻せる碑あり。

更に細徑を熊笹の繁茂せる間に求め瀑の上流の靜穩なる景を見つゝ、猶二町ほど行けばうつくしき湖水の光は疎林の間より鏡のごとく顯はれ來りて、其の風光の明媚な

り思はず人をして快哉を叫ばしむ。まして南岸橋に至れば

●●●●● 中禪寺湖 の晴波は畫くがごとく翠微を疊み、湖畔ホテルの洋館の岸に二三の白色ボートの繫がれたる、波打際を金髮明眸の人の樂しげに逍遙ひたる、遠くかのアルプ山中の湖畔にはあらずやと思はる。中禪寺は湖水の北岸にありて、路は外人の別墅の間より大門のところに通じ、それより旅亭參差として、晴波濼々、真に一幅の畫圖のごとし。巫女石、牛石等の奇を見て、一箇の銅の華表を過れば、右に男體山登拜小屋の長く遠く連れるを認む。其の數十棟にして、毎年七月禪定の時登拜者の宿泊に充つ。中宮祠社務所の前を過ぎて、

●●●●● 二荒神社中宮祠 あり。社は南向にして、總て赤壁を以てこれを塗れり。これ、則ち開山の僧勝道が登山せし時の遺跡にして、實にそれより千有年の月日を経たり。背後に唐銅の華表ありて、毎年七月、登山を許す時に限りて之れを開く。而して男體山は直ちにその門内より起りて、その高さ二千四百八十三米を有せり。

男體山登山期は毎年舊曆七月一日より七日までにて、遠近よりの白衣行者雲集し、山中俄かに緑日を開くが如き趣あり。大抵前夜十一時頃より登りて、頂上に日見出を見るを例とす。

●●●●● 相隣りて本地觀音堂あり。本尊は僧勝道の手から刻せしと稱する素木の千手觀音にして左右に四天王の像を安せり。傳へ言ふ、開祖當山を開くに當りて、觀音の奇瑞を得ること一再ならず、即ち南海の補陀洛山に象り、因つて以て補陀洛山と名せしを後世訛りて二荒山と爲し、更に僧天海に至りて日光山と稱せしなりと。今これを對岸歌が濱に移せり。其處より望めば、男體山の形玲瓏として恰も富士のごとく、その翠影の靜かに湖面に搖曳せる、他に其比を見ず。其他合瀉、寺ヶ崎五大尊等皆南岸の勝地にして船禪頂を行ふもの、賽するところなり。上野島は五大尊の湖上五町餘のところにありて、中に開山勝道の墓あり。墓は男體山と相對し、遙かに中禪寺の人烟を望み、風光頗る佳なり。湯元に通ずるの路は中禪寺より直ちに湖畔に添ひて、各國公使の別墅の相連れる間を過ぐること一里處々に湖光の潑艶として畫くがごとくなるを見

遂に西北顯釋坊ヶ淵に至りて、前に千手が崎の巖を括りたるがごとく遠く西南に延びたるを認む。こは船禪頂最後の靈場にして、僧勝道が湖上に於て金色の千光眼の影向を拜せしの地、一字の堂ありて、中に千手觀音を祀れり。千手原千手清水等の勝あり。ことに千手崎一帯の地には千手砂利と稱する純白なるものありて、その美しきこと、恰も舍利石の如しといふ。

菖蒲ヶ濱 は顯釋坊ヶ淵より更に西に曲りたる所に在りて、其所には數軒の漁家相接して、中禪寺より通へる便船あり。それより路は湖水を離れて、檜の大樹の繁茂せる間を一町程過れば、水聲次第に路傍に高く、地獄川を渡りて、その上に龍頭瀑の奇景を見る。

龍頭瀧 瀑と言はんよりも、寧ろ溪流の奔騰せるものと稱すべく、一二町ほど絶えず路に沿ひてその特色の風景を展開せり。

戰場ヶ原 更に行けば、男體山の裾野たる戰場ヶ原の荒涼寂寞たるさまは、漸く眼

前に顯はれ來りて、枯れたる大木の所々に骨立せる落葉松のさびしげに此方彼方に聳えたる、そいろに別天地に入るの思を起しさむ、泥んや右には男體山の偉大たる姿をはじめとして、大真名子、小真名子、太郎山は北方前面にたかく、左には白根の連峯幾重となく相疊みて上州沼田に越ゆるといふなる、金精峠もそれと明かに指點せらるるに於てをや。ことにこの原より微かに見ゆる湯瀑の髣髴は必ず指點することを忘るべからず。一道の路は落葉松の二三株聳えたる間を掠めて、遙かに古賀谷の森林に接し、その長さ大凡一里許、春秋の花、ことに菖蒲の美はこの原に於ける唯一の奇觀なり。否此の叢原はさまざまなる珍草異卉に富み、植物採集家の爲めには本邦有數の寶庫なり。芦荻林のごとく繁茂せる沼地に注げる、銅色帯びたる小流のところ／＼地圖のごとくなるを見て、古賀谷の一口水を舊道の岸石の罅隙に求め、更に林間に入ると數町湯瀑と記せる標石は路の傍に倒れたるを見ん。

湯瀧 瀑は左に入ること二町の奥にありて、湯湖の水溢れて、この奇觀を爲し、高さ

八十米餘斜に平扁なる大岩の上を瀉下して、その偉麗雄大なる、他の三天瀑に比して更に輸するところなるを知らず。瀑に添ひて急阪を上れば、路は戰場ヶ原より來りたるものと相合して、眼前俄かに寂寥極まれる。

湯湖の一景を開く。前白根の翠微は美しく暗碧なる湖心にその影を涵して、一鳥啼かず、一魚躍らざる四面の光景の清寂なる、思はず人をして神秘の深奥に觸れたるを覺えしむ。湖畔を縫へる路は一度深林の中に入りて、再び湖水の西方に通じ、その對岸一帶の地に一道の湯の烟と十數戸の旅亭の陸續として相連れるを見る。これ即ち日光山中最も奥なる、

湯本温泉 なり。中禪寺を去ること三里、神橋より六里にして、旅亭の人は皆な鉢石より上り來りたるもの、冬に至れば家をつゝみて皆な麓に下ること常とす。湯の數を有すること十、泉質皆硫黄泉なり、且つ地は海面を抜くこと四千尺、氣候は三伏と雖も八十度を上らず、實に避暑の好適地なり。

白根山 は湯本より登攀す。日本山嶽志に曰く「路峻惡、案内者なければ登る可からず、上り四時間半、下り三時間なれども、山上の眺望時間を費するを以て、全一日を要す。山中水なし、最初の登攀峻絶困苦を極む。是れ前白根山に登るなり。前白根は舊火孔壁の一端に似たり、近來爆發し火孔壁の西方に更に一新圓錐形を突起し、其東足に一谿谷を生せしが爲めに他の舊火孔は悉く埋没せられたり。谿谷は中心より南北に傾斜し、北端に深綠色の小池あり、前白根を下り舊火孔壁を横ぎり、白根山即ち奥白根に登る、徑路は圓錐形の崩壊せし所にして、右方に向ひ遂に頂上の新火孔壁に達す、壁は大に破壊せり、別に夥多の小火孔ありて蜂の巢の如し、此所よりの囑目頗る壯大なり。」

日光裏山 と稱する地は、男體、女峯、赤雉、大真名子、小真名子の諸峯より遙かに北方栗山郷に至れる十數里の間を指せるものにして、世人多く其境を知らざれど、亦奇勝に富めり。而して此の裏山に登攀するを裏山禪頂といふ。先づ日光瀧の尾道の行

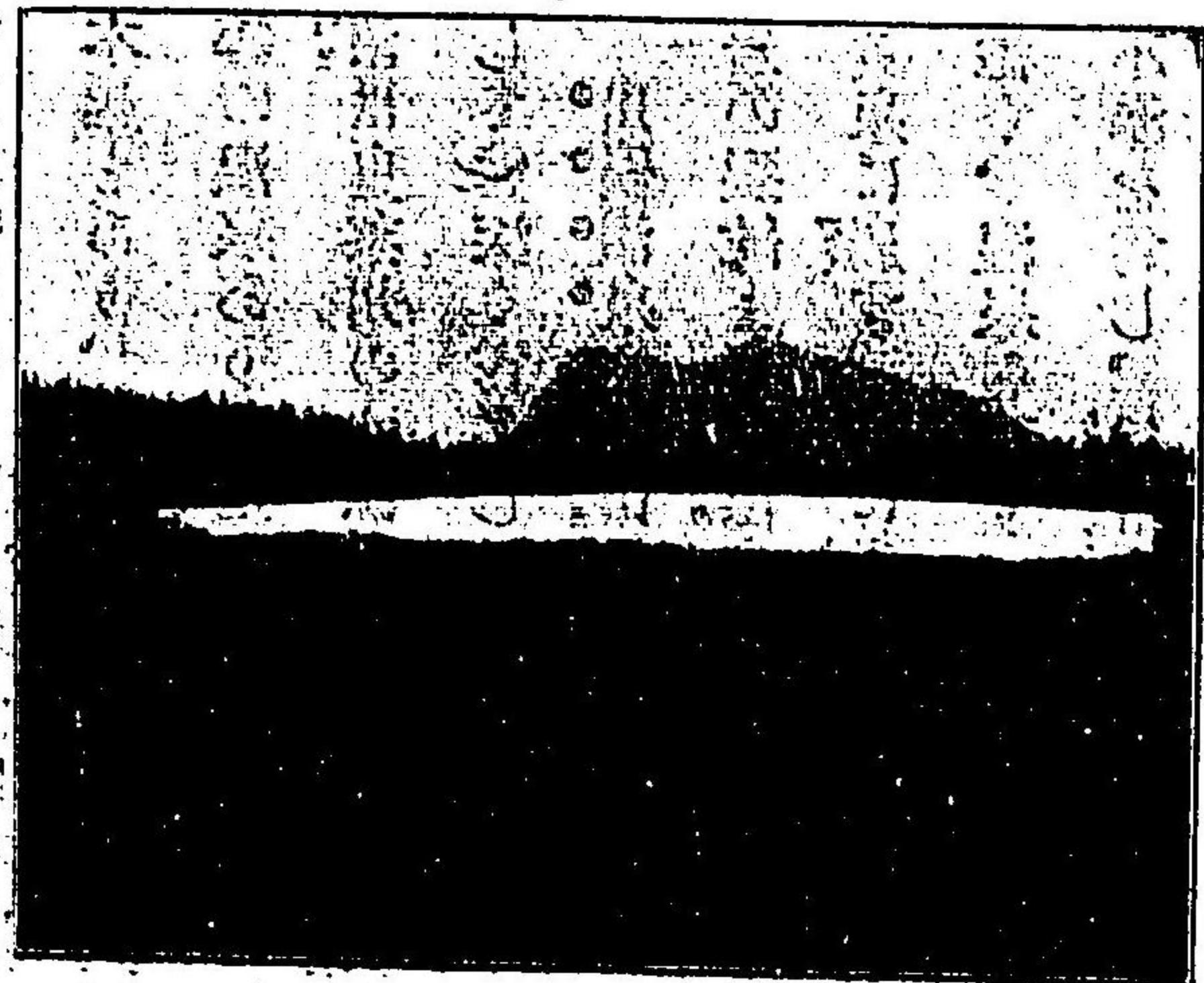
者堂より折れて殺生石に至り、風景絶佳なる高原を登り、遂に入風と稱する所に出づ。これを下れば、一面缺けて女峯の大谷に對し、前に七瀧の壯觀を瞰る。これより又上る。路頗る險なり。山の半腹を行く時、男體山の下に中禪寺湖の湖光を認む。これより唐澤の宿まで一里半の森林なり。唐澤の宿に行者小屋一軒あり。附近に清水あり、渦を醫すべし。これより二十町、急峻削るが如くして、漸く女峯の絶頂に達す。頂上に一小祠あり。又有名なる偃臥松あり。絶嶺の眺望天下無双と稱するも溢美にあらじ。下れば、劔の峯の險あり。左右深谷にして一步を誤れば、身は千丈の谷に落ちん。帝釋山を過ぎて、下れば、日光裏見瀧より栗山野門に出づる富士見越の道路に出づ。此附近木小屋多ければ、一泊するに不便はなし。小真名子、大真名子を越えて、男體山の裏に至る。大真名子に千鳥返の險あり。男體山裏口の登路に

志津の宿あり。行者小屋一軒あり。夏時は日光より堂守出張す。此より男體山への登路一里餘あり。かくて志津より太郎山に登り、湯本に下る。栗山は十三郷ありて、平

家の一族此處にかくれたりと稱す。日本の文明にはめづらしきほどの寒村なり。前にも記せし如く、其道路は日光山脈を横断するものに、小休戸越と、富士見越と、湯本越とあり、大迂回をすれば、鬼怒川の谷を川治より入るなり。湯西、川俣、日光澤等の温泉あり。鬼怒川の上流に湯澤あり。湯を湧出し石灰質の柱を作るといふ。鬼怒沼は鬼怒川の水源なり。また川俣より南金澤の檜枝岐に出づる間道あり。深山幽谷にして雲深く霧多し。

川俣温泉 栗山村大字川俣に屬す。村を距ること一里、鬼怒川の清溪に臨み、花崗岩の裂罅より湧出す。泉源三所あれども孰れも無色透明硫化水素臭を帯び、鹽類泉硫黄泉に屬す。殊に奇とすべきは、これより二里餘を隔てたる湯澤にして、その溪流は悉く、温泉と稱すべく、或は河岸に瀦留して池を爲し、或は岸壁の裂隙より湧出して小瀑を爲し、俚俗吹口と稱する處に至れば、流紋石の斜面なる裂隙より温泉湧噴し、中には堆積せる沈澱物の圓錐形をつくるありて。その頂點なる小孔より温泉沸々とし

て噴騰せり、其の圓錐の數三四、その最も大なるものも高さ廿六糎、底徑十糎を有せ



り。されどこの圓錐形は永久不變の者にはあらず、漸く堆積して漸く高く、地方人の言ふ所に從へば最高三分の二米に達したることありと。而して是等長大なるもの、一度大雨に逢へば河水と共に流れ去るを例とす。此の噴泉は硫黃質にして其の味頗る鹹苦に、圓錐を構成せるものは、重に硫酸石灰にして、色白く質粗なり。

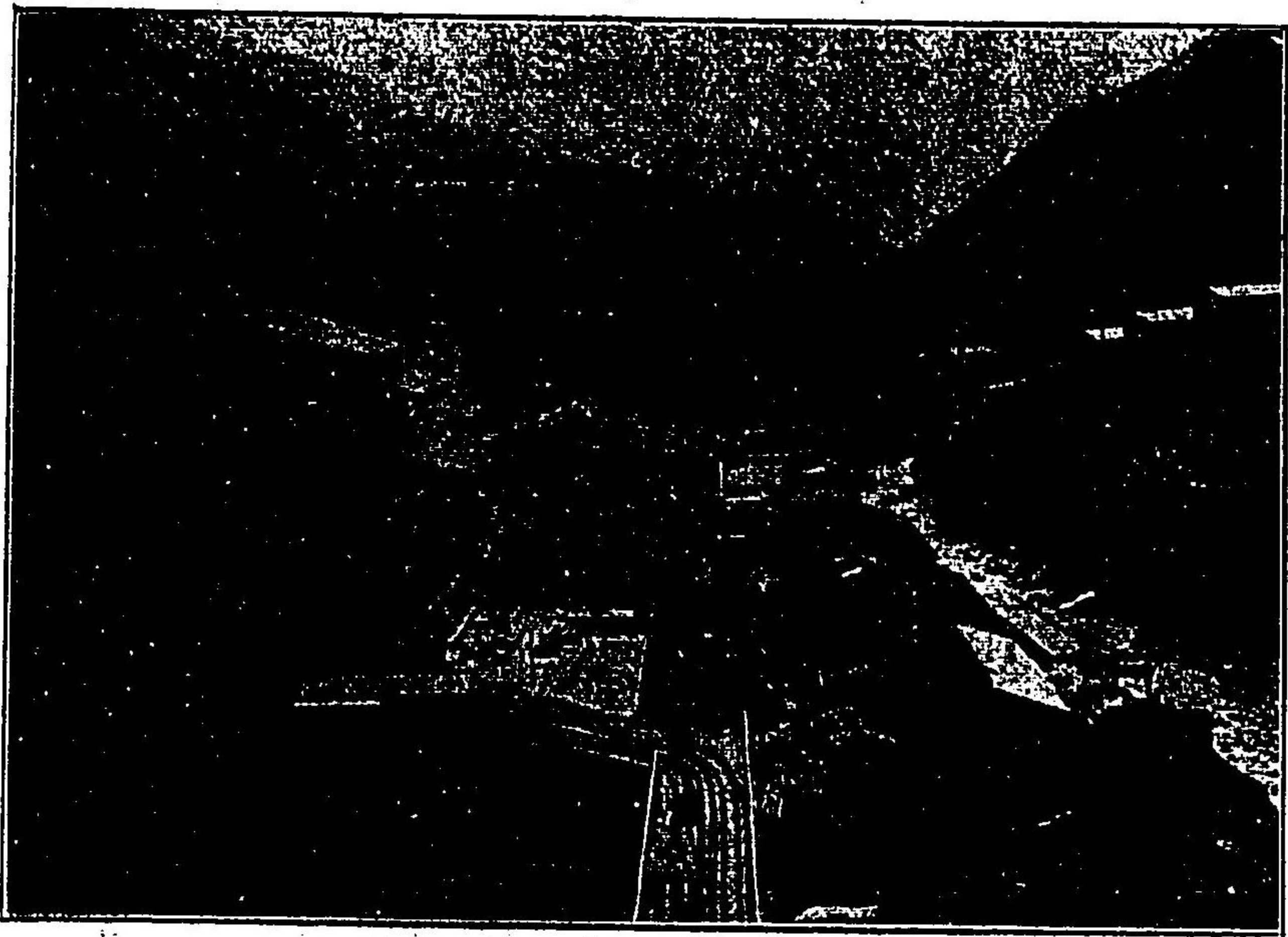
その他、附近に同質の温泉幾條となく流出て小瀑を成し、其の流口には同質の沈渣物無數に垂下せるを認む。地、深山窮谷の中にあるを以て、人多くこれを知らざれども、斯の如く湧量夥多なるは蓋し稀なり。川俣温泉より

鬼怒川を溯ること猶三里餘、日光澤温泉あり。鹽類硫黃泉にして、流紋岩より湧出し泉量また甚だ多し。

以上にては日光の案内を終りたり。次に足尾のことを記せん。

足尾 足尾町は日光の西南に位し、渡瀬川の源流帶の如く流れたり。銅山あるを以て其名天下に高く、その規模の宏大なる、其製銅の多額なる、蓋し、銅山としては本邦他にその比すべきものあるを見ず。日光よりすれば、細尾村より一里にして足尾峠に達し、更に御子内を経て赤倉に達し、西方上野國の大間々町よりすれば、風光絶佳なる渡瀬川の流を浜りて、花輪、神戸等の諸驛を經、以て足尾町の一なる小瀧に達す。往古銅山、銀山の盛なりし頃は、新柴子、赤澤の二村は足尾千軒と稱し、頗る繁榮を極はめしも、延享、寛延（今を距る、百四十年）以後漸次衰頽し、僅かに三百餘戸を餘すのみなるに至りしが、明治に及びて、其の業更に復活し、今は人家谷を填め、山に架して、交通の便、亦四方に開け、人口頓に三萬千餘の多きを有するに至れり。銅山は周圍大凡

五六里、一山悉く秃山にして、復一樹
 一草を生せず、往古開鑿せし坑はその
 數實に數百餘竅の多きを數ふれども、
 現今着手せる者は僅かに六五ヶ所に過
 ぎず。されどその坑の深さは數千尺に
 尾及び、採鑛の盛なる坑夫の數の一萬人
 銅を數ふるを以てその一斑を推知すべ
 し。渡良瀬川の沿岸には大なる鐵製の
 烟筒日夜烟を吐き、鑛を運送するトコ
 ロの響は高く四面の山に反響し、骨立
 したる小山の處々には坑夫の小屋陸續
 として相連り、硫氣はそれとなく空氣



に混じて、この谷地に入るもの、皆な一種幽鬱不快の感に撲たれざるはなし。而して
 鑛石を搬運する馬車鐵道は一は上州大間々に達し、他は野州日光に達せり。されど御
 子内、細尾の二嶺は鐵道を敷設すること困難なるを以て、特に巨大なる鐵索をつくり
 て、以てその便に供せり。

庚申山 足尾町より四里、直立四千六百尺に過ぎざれども、山中に奇岩怪石疊峙し
 て或は佛像の如きもの、或は鳥獸の如きもの、千態萬狀一々名狀すべからず。此山は
 元祿年間都賀郡の醫師佐野某藥草採取の爲め來りてこれを發見せしものに係り、それ
 より世に顯はれて近來遊客の登臨するもの極めて多し。山中に神社あり。神主の家に
 泊することを得、されど山に迷はざれば日歸りに見物し了るを得べし。

足尾を開放れて、上州街道を四行すること六町許、大字、中居といへるところより上る。登山の表口にして
 丈餘の一大碑石立ち、碑面に庚申山の三大字を鐫る、又別に御別所(山麓の意)迄、從是行程百十四丁と刻し
 たる石標あり。則ちこの碑の在るところより右折し、中居の一の碑表より、庚申山の麓までを百十四町(三
 里六丁)に別つ。その一丁目毎に石標を立て、參詣者先導の便に供す。皆東京講中の建設するところなり。



足尾庚申山

過ぎて、右に向へば、高さ数丈の危石溪間より兀立す。梵字石則ち是れ、更に前めば不二見岩あり。その傍
螺石、蠟燭石の奇あり。之を西極となし、途を東に轉すれば、胎内賣となる。第一を小胎内といひ、洞穴小

四十九丁目に銀山平といふに出づ。足尾町より二里まで。
二里。面積四五町、地勢や、坦平、鐵山神社あり。鐵夫輩
の飯場長屋多し。是より六十三丁目までは、庚申澤の溪流。
深々たるところに沿ひて爪先上りとなり。六十四丁目より、
數十町の間、華嶽たる山腹の嶮岨を上下し、八十五六町以
上、山坡愈々急峻、登り一方にて、百十四丁目なる山麓に
達す。社務所あり、喫飯投宿、登山客の便に供す。此坊を
出立點として、山頂の所謂、奥の院まで、一里餘あり。山
中光景の大體を記すれば、右社務所の傍より、僅に登りた
るところに、百間幕と名くる岩石あり。又登れば茸石あり。
その先なる路傍に峙てるを槽石といひ。それより愈々登る
に隨ひ、奇石怪岩鬼貌を呈し、やがて一の門に抵るや、門
は二柱石屹峙し、頂に巨岩横りて、自ら門形を成す。こゝを

にして、僣倣せざれば入る能はず。その次を大胎内といひ潤さ、六尺許直立して入るべし。是より上下十餘
町にして、奥の院に達し。更に下りて下向道を五六町降れば、東の妻といふところに出づ。左は男體山を望
み、右に筑波加波を懸し、遠く房總の海を瞰る。こゝより熊笹を推し分け、直下二十八町にして。例の社務所
に歸へり得。山嶽飲料水に乏しきを以て、豫じめ準備あるを要す。所謂山開きは、毎年舊曆四月八日に始ま
りて、同九月九日に終るを以て、この間に登山するを便とす。その他徑を鎖して、登攀を得せしめず。日
光より山頂までは九里半と稱す。即ち日光郡より大字細尾まで一里二十九町、細尾より神子内まで(細尾峠
細尾峠は登ること一里餘にして、頭に達す、海拔千二百三十米突、半腹と絶頂とは、茶店あり、下ること一
里、枋木平を得。又數町にして神子内に下るなり。峠は八汐の躑躅を以て名あり。冬日往々猿猴の群を成し
て、出沒するを見るといふ)の峻嶮を踰えて、二里二十二町、神子内より足尾町まで一里三十二町、總計六
里十町にして、足尾よりは前記の如し。(山嶽志小島氏増補より)

○那珂川の峽谷 那珂川は水源を那須郡高林村大字板室に發し、東南流して兩鄉村
に至り余笹川を容れ、直ちに南に向つて流れ、箒川、武茂川、荒川、逆川等諸水を萃
め、烏山町の南方より東に彎曲して芳賀郡の一角を掠め、直ちに常陸國に入る。國內
に於ける水程約二十一里、東南西の三方とも多くは山にして、僅かに北部上游流域の

西方に向つて那須野の曠原を展く。流域の大部分は那須郡に屬し、川に沿へる名邑として鳥山町、馬頭町、黒羽町等あり。道路は芳賀郡より來りて鳥山、那珂、湯津上、川西、伊豆野等を経て磐城の旗宿に至る關街道、鳥山より馬頭を経て常陸の太子町に至る太子街道、太田原より黒羽に至る黒羽街道、太田原より鍋掛、芦野を通じて磐城の白坂に至る白川街道等を重なるものとし、別に茂木(芳賀郡)より鳥山を経て鹽谷郡の喜連川に達し、以て舊奥羽街道に合するものあり。鳥山附近は那珂の本流を荒川等の支流の合湊點に當り、や、小盆地を成す。芳賀郡の茂木附近は煙草に名あり。

茂木町 芳賀郡の東北邊に位し、人口凡そ六千を算す。同郡眞岡町へ約六里、那須郡鳥山町へ五里を隔つ。附近、煙草の産多し。

鳥山町 那珂川とその支流との中間に位し、人口約四千五百を算す。もと大久保氏三萬石の封邑にして、東方宇都宮市へ凡七里を隔つ、町に眞宗慈願寺あり。

馬頭町 鳥山町の北方にして、同じく那珂川の氷岸に近く、人口約五千を有す。町

より東方常陸に入る街道二、一は東稍北して久慈郡の太子町に至るべく、一は東稍南して那珂郡に至るものこれなり。

三和神社 馬頭町より那珂川を越えてその西北方那珂村大字三輪にあり。式内の古祠にして、大物置神を祭る。日本書紀に「對曰吾欲住日本國之三諸山、故即營宮彼所

使就而居、此大三神之神也」とあり。社境瀟酒、而も神寂びて雅趣多し。また、同村大字小川に那須城址あり。天治中那須資家の創築にして、那須與一は即ちその人の裔なり。

國造の碑 那珂村の北湯津上村大字湯津上にあり。俗に笠石と稱す。其形ち扁石をくぼめて笠の如く、碑の上にあり、故に此名を有す。碑は實に文武天皇の庚子年に建しものにて、日本第一の古碑なり。碑の高さ四尺許り、正面は砥の如く磨きて左右其外は自然石なり。碑文は一行十九字づゝ八行にて百五十二字あり。其文に曰く「永昌元年己丑四月、飛鳥淨御原大宮、那須國造追大壹那須直草提、都督被賜、歲次庚子

年、正月二十壬子辰節物故、意斯麻呂等立碑銘德云爾、仰惟殞公廣氏尊胤國家棟梁、一世之中重被貳照、一命之期連見再甦、碎骨現隨豈報前恩、是以曾子之家無有驕子、仲尼之門無有罵者、行孝之子不改其語、乃無心澄、神照乾大、引童子意、香助坤作、從之大合、言喻守故、無翼長飛、無根更固。天和の初めまでは蔓草の中に埋没し、知るもの少し。水戸光圀公これを開き儒臣佐々宗淳に命じて鑿せしめ元祿四年に一塚を築きその上に室形造りの堂を建て、碑を安置せり。碑文に關しては佐々宗淳、源白石伊藤東涯、長久保赤水、蒲生君平等の考釋あり、好事の人は參考すべし。また碑の附近に古塋あり。下野國誌は那須國造の墓なるべしと説けり。

●●●●●
 黒羽町 大田原町の東方三里にして、東北線車驛西那須驛より三里二十九町を隔つ。那珂の水流を挾んで市街を成し、東岸に當るを黒羽町とし、西岸に處るを川西町とす。人口凡て五千五百、舊大關氏二萬三千石の城邑にして、芭蕉が大關氏の家老職淨法寺某を音づれしこと奥の細道に見えたり。關街道はこの町より更に北に向ひ、伊王野

(黒羽より三里半)を経て磐城の西白河郡に入る。

●●●●●
 雲岩寺 (佛國々師墓) 黒羽町の東方にあたり雲岩寺村にあり。東北線西那須野停車場より行くべし。大治年中初叟元和尙の開基に係り、禪宗臨濟派に屬す。本尊は惠心僧都作四尺六寸ばかりの釋迦坐像なり。寺傳に據れば、元和尙は保延元年六月寂し其後中絶し諸宗の徒雜居す。山伏勝願住すること年久しく、遂に佛國禪師を戴きて、弟子の禮を執り、此山を以て法施とす。弘安六年平時宗大檀越となり佛國再建して禪林とす。開基より此に至る一百四十九年なり。其後佛應禪師來り住す。此三師を雲岩の三佛開山とすと。寺境廣く、堂宇宏壯にして古雅愛すべし。寺境に東芝軒の舊趾あり。是れ佛國山居の處なり。世に傳ふるところの「南北東西天地寬、煙霞霧露野僧衣、或時拈起德山棒、萬里無雲打月歸」といへる閑居頌は此にて作りたといふ。その他佛國國師の墓をはじめ、國師山居の舊跡、殘夢禪師の座禪石、瓜畎橋、手向川、白糸の瀧等あり。

奥の細道に曰く「當國雲岸寺の奥に、佛頂禪師山居のあとあり。たてよこの五尺に足らぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせばと、松の炭して、岩に書きつけ侍ると、いつぞや聞え給ふ。そのあと見んと、雲岸寺に杖を曳けば、人々すゝんで、俱にいざなひ、若き人たち騒ぎて、覺えずかの山の麓にいたる。山は、奥あるけしきにて、溪路はるかに、松杉黒く、苔滴りて、卯月の天、今なほ寒し。十景五橋を渡りて、山門に入り、さて、かのおとはいづくの程にやと、うしろの山によぎ登れば、石上の小庵、岩窟に結びかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室を見るが如し、木つゝきも庵はやふらす夏木立、と取りあへぬ一句を、柱にのこし侍りぬ。これより、殺生石に行く」。これ芭蕉が黒羽の館代の宅より雲岩寺を訪ひし記事なり。

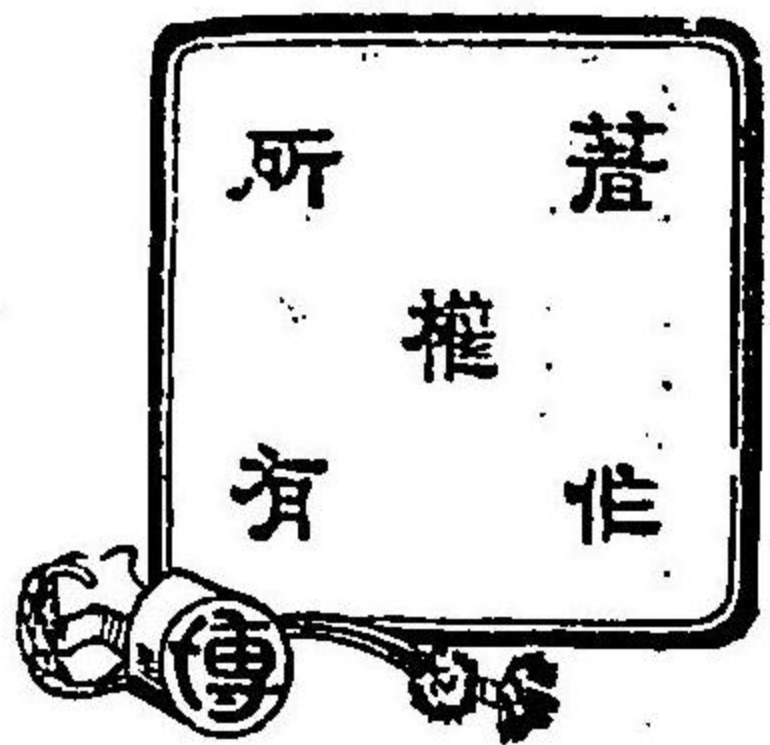
●蘆野町 那須郡の東北隅に位し、舊奥羽街道の衝に當る。奥羽街道は大田原町より鍋掛を経て、この地に達し、更に比して磐城の白河町に至れり。町の人口約三千、西北方黒田原停車場を距ること二里に過ぎず。

新撰名勝地誌卷四終

明治四十三年三月三日發行

（新撰名勝地誌卷四部）

定價金六拾錢



編者 田山花袋

發行者 大橋新太郎

印刷者 河合辰太郎

印刷所 凸版印刷株式会社本所分工場

發行所

（東京市日本橋區本町三丁目）

博文館

振替貯金口座東京二百四十番
取寄部川越橋本局二六二〇番

田山花
袋君編
新撰名勝地誌

全十二冊

洋裝四六判總布上製裝釘頗美
各卷銅版精密地圖及寫真版插入
紙數各冊五百頁以上印刷鮮明紙質精良

正價
一冊 金六拾錢
郵稅一冊 金八錢

卷一 ● 畿 内 (山城○大和○河内○和泉○攝津)

近畿地方の圖○京都附近の圖○奈良附近の圖○大阪附近の圖(銅版)

卷二 ● 東海道西部 (伊賀○伊勢○志摩○尾張○三河○遠江○駿河○甲斐○伊豆)

宇治山田附近の圖○名古屋地方の圖(銅版)

卷三 ● 東海道東部 (相模○武藏○安房○上總○下總○常陸)

東海道東部○鎌倉の圖○横濱市の圖(銅版)

卷四 ● 東山道西部 (近江○美濃○飛騨○信濃○上野○下野)

宇都宮より日光迄沿道略圖及宇都宮市街圖(木版)長野市外二葉

卷五 ● 東山道東部 (磐城○岩代○陸前○陸中○陸奥○羽前○羽後)

(銅版)仙臺、松島、鹽釜總括圖及仙臺市、秋田市(木版)山形市、酒田町

卷六 ● 北海道 卷七 ● 山陽道 卷八 ● 山陰道

卷九 ● 南海道 卷十 ● 西海道 卷十一 ● 北海道樺太

卷十二 ● 臺灣琉球

本書の特色は交通路に由て名勝を記したる其一也産業沿革にも出來得る限り注意を拂ひたる事其二也つとめて新しき材料に依りてこれを記したる事其三也旅行者の伴侶たらしめんが爲めに紙質を精選し裝釘を堅牢ならしめたる事其四也ことに最も特色とすべきは編者の足跡殆んど海内に洽く殘山剩水と雖も訪はざるなく探らざるなく従つて其記述と排列と頗る精確を極めたる事は也況んや處々に各名勝地の寫真數十種を挿入し宛然人をして足其地を踏むの思ひあらしむるに於てをや旅行せんと欲するもの各地の名勝の分布を知らんと欲するものは來りて本書を見よ

博文館發行

諸元勳題字に並序 農商務省 德永勳美君著

●發行所 博文館

韓國總覽

全一冊 菊判上製總クロース
金模樣押美本。紙數千五百頁
正金參圓卅錢
小包料七拾錢

地圖五葉(數色刷)寫真版五十四頁(光澤紙)挿入

本書の内容は韓國に於ける總ての事項を網羅し各章所載事項は最新的確のものを採り精査探討し遺憾なからしめたり

し最も重きを置きたる所以のもの朝鮮經營の實業家經濟家以て朝鮮經營の羅針盤となす便益を享くる多大なるべき

概要	總論。地理。沿革。近世史。行政組織。財政。教育。社會組織。風俗習尚。農業。商業。工業。水産業。鑛業。山林。交通運輸。金融
綱目	機關。通貨。度量衡。其他

韓國新地理

文學士 田淵友彦君著

第一編	地文地理○名稱○位置○境界○廣袤○海岸線○地勢○山誌○水誌○氣候○潮流○潮汐○水産物
第二編	人文地理○住民○宗教○教育○政治○兵制○財政○外交○産業○貨幣○交通
第三編	地方誌○慶尙道○全羅道○忠清道○京畿道○江原道○咸鏡道○黃海道○平安道

並製正價金四拾錢 郵税金八錢
特製正價金五拾五錢 小包八錢

朝鮮史

文學士 久保天隨君著

本書記する處上は稷貊等の半島最古の民族を論じ而して箕影二氏漢族文化の影響を探究し次いで前後兩三韓高麗朝鮮に及び日本との交渉に就いては殊に詳密なる記述をなし最後に今帝時代に至りては殆んど全卷の三分の一を費し七朝の興亡力めてその隱微を發す史學研究の念あるものは固より論なく東洋問題に注意するもの亦必ず一讀せざるべからず
……(全一冊 菊判三五〇頁)……

並製正價金四拾錢 郵税金八錢
特製正價金五拾五錢 小包八錢

博文館發行

巖谷小波君著 久保田米遷喬伯裝釘 (全二冊新形中判洋布金模樣紙函入)

新洋行土產

正價各金壹圓卅錢
小包料各
拾六錢

發行所
博文館

先に伯林二年の觀察を洋行土產二卷に現はして爲めに洛陽の紙價を貴からしめし著者は此度渡米實業團に加はつて在米三月間の見聞を新洋行土產として發表す著者が銳利なる眼光と輕妙なる筆致とは世已に定評あり而かして彼の實業團の渡米や亦本邦空前の舉なりとす本書他の外遊記に比して其光彩を異にせるも

の業より論を俟たざるべし

吉田博君著

● 魔宮殿見聞記

● 魔宮殿の傳説は現代の讀書社會を驚かすべき南歐特殊の思想を代表せり ● 魔宮殿の寫生畫は當代第一流の吉田畫伯の自ら提供せる逸品なり

全一冊 藥判上製四百廿頁 正價金九拾錢
原色版二枚寫眞版十二枚入 小包料八錢

田中涓人君著 (全一冊四六判總布) 上製七百三十二頁

● 倫敦繁昌記

大阪毎日新聞評 神戸又新の倫敦特派員たる著者が一種奇聲の觀念と輕妙洒脫の筆致を揮つて倫敦の表裏兩面を縱橫無盡に活寫せる通信を編次して一卷となせるなり本書に於て最も取るべき處は忠實によく倫敦の各種の社會を描寫し恰も一幅のパノラマを眼前に展開せる如き觀あらしめたる處にあり倫敦案内記としては蓋し其優なるもの一ならん

正價金壹圓
小包料八錢

文學姊崎正治君著

花

全一冊洋裝四六判裝釘瀟洒
コロタイプ及寫眞版卅二枚入
正價金壹圓卅錢

南イタリヤの
美國、北メ
ソットの山地、野邊には草花を
摘み、古寺に美術の花を賞で
し日記一篇、そが中には湖畔
の佛院會に異國の友を會して、佛教を語り、
ロマの寺院に聖教會の生命活動を觀察し、南
歐に北歐にあらゆる種類の交友に接したる跡を傳ふ。天然
美術の記録宗教文明の評論として江湖の一讀を求む。



小包料
金八錢



日

鎌田榮吉君著
歐米漫遊雜記 (九版)

記

全一冊四六判四百二十四頁
正價金四拾錢 郵稅六錢

發行所 博文館

(三版)

國府犀東君著

(全二冊菊判洋布特製紙函入)
上卷 千二百頁 下卷 千頁

大日本現代史

●比類なき人文の發展史

本書の特色

聖代を謳歌し活勢を描寫せるは本書第一の特色たり
宇内の大局を照應せしめ帝國を中心として世界を觀たるは本書第二の特色たり
筆を彼兒理の來航以前たる露人の太平洋進出に起し以て日露戰役後に及べるは第三の特色たり
主要の史實必らず簡明直截の批判を加へて其概觀を識得せしむるは第四の特色たり
略ぼ三十九年間のあらゆる出來事を網羅して餘蘊なく一目瞭然たるを得せしむるは第五の特色たり
一書大日本現代史直ちに之れ比類なき人文の發展史にして又異彩ある國家の大飛躍史なり

●異彩ある國家の大飛躍史

博文館發行

上卷金貳圓五拾錢

小包料金拾六錢

下卷金貳圓

小包料金拾貳錢

文學士 齋藤隆三君著

●發行所 博文館●

近世世相史

全一冊洋裝菊判特製
紙質精良印刷鮮明
風俗木版密畫數十個挿入
正金貳圓廿錢 小包料拾貳錢

江戸時代の三百年は我文化史上に未曾有の大發展をなしたる時代なり、文物の盛極まり趣味の向上比隣
なし。本書は即ち此三百年間の世相を活寫したるもの

期を分つ四、章を立つ六十六、其時々の世

態人情の推移を論じ、衣裳修飾の變遷を説き、

更に美術工藝の進歩を述べ、江戸と京阪の

繁昌を明にし、進んでは遊里を叙し、演劇を説き、

音曲を語る。

叙事總て詳密、加ふるに流麗の筆を以つて、實に風俗史に造詣深き著者が多年の研鑽に成れるもの前
代の世相風俗を知るべき唯一絶好の書也。史に志すものは素より、今日の世の據て來る淵源を知らんと
欲するものは机上一本を備へざるべからず。

●大日本建國史

(賜天覽) 木村鷹太郎君著

全一冊菊判特製
紙質精良印刷鮮明
正金壹圓五拾錢
小包料金八錢

●大日本歴史

法學博士 有賀長雄君編

上卷正金貳圓
下卷金貳圓五拾錢
小包料拾六錢
小包料拾六錢

→ 華 精 の 壇 文 代 現 ←

名家小説文庫

目 書 刊 既

第五編	● 柳浪叢書 (後編)	第九編	● 秋聲叢書
第四編	● 柳浪叢書 (前編)	第八編	● 小波叢書
第三編	● 澁柿叢書	第七編	● 水陰叢書
第二編	● 露伴叢書 (後編)	第六編	● 花袋叢書
第一編	● 露伴叢書 (前編)		

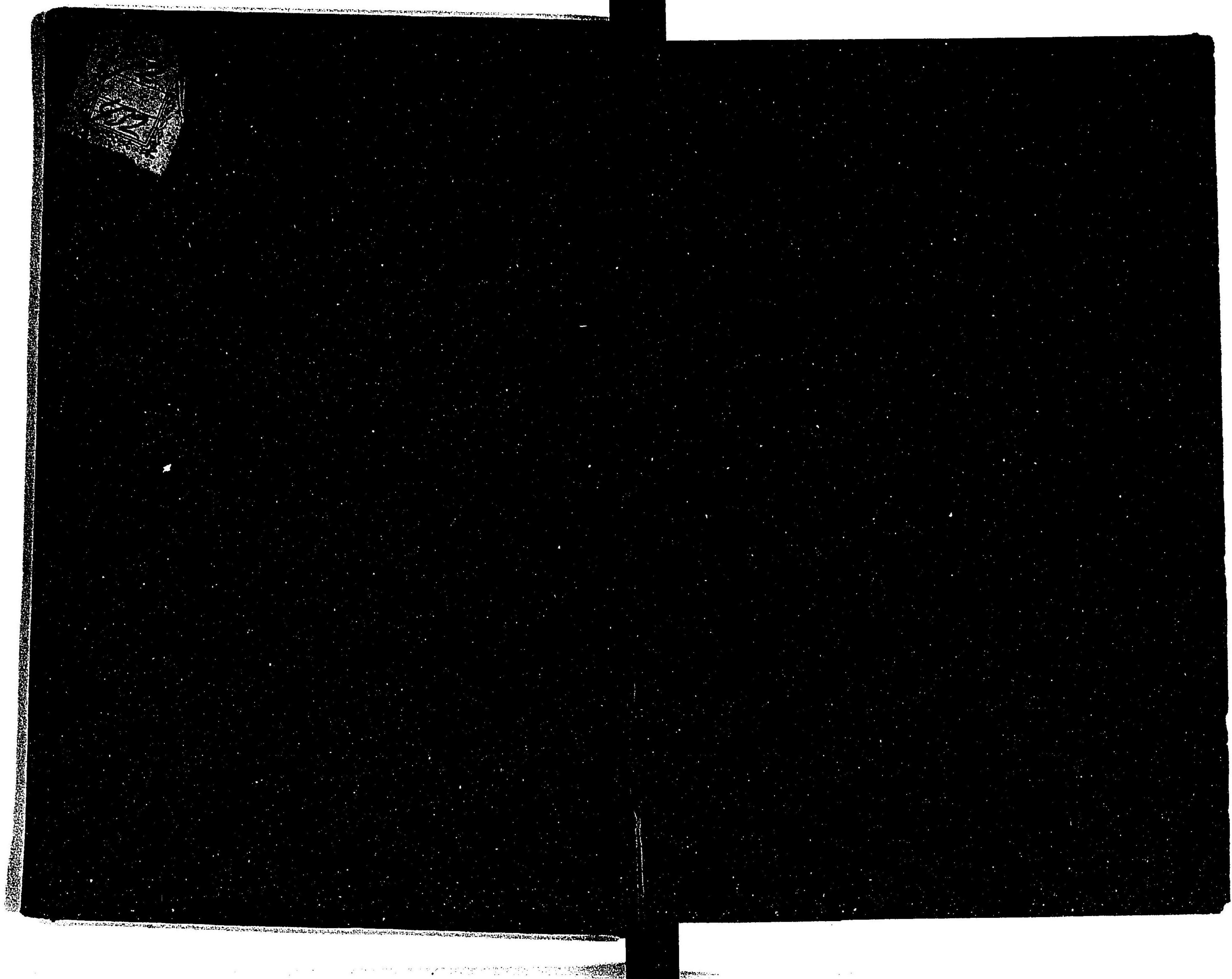
● 本文庫は著者が最近文壇に盛名を馳せたる代表的傑作各廿數篇宛を收む

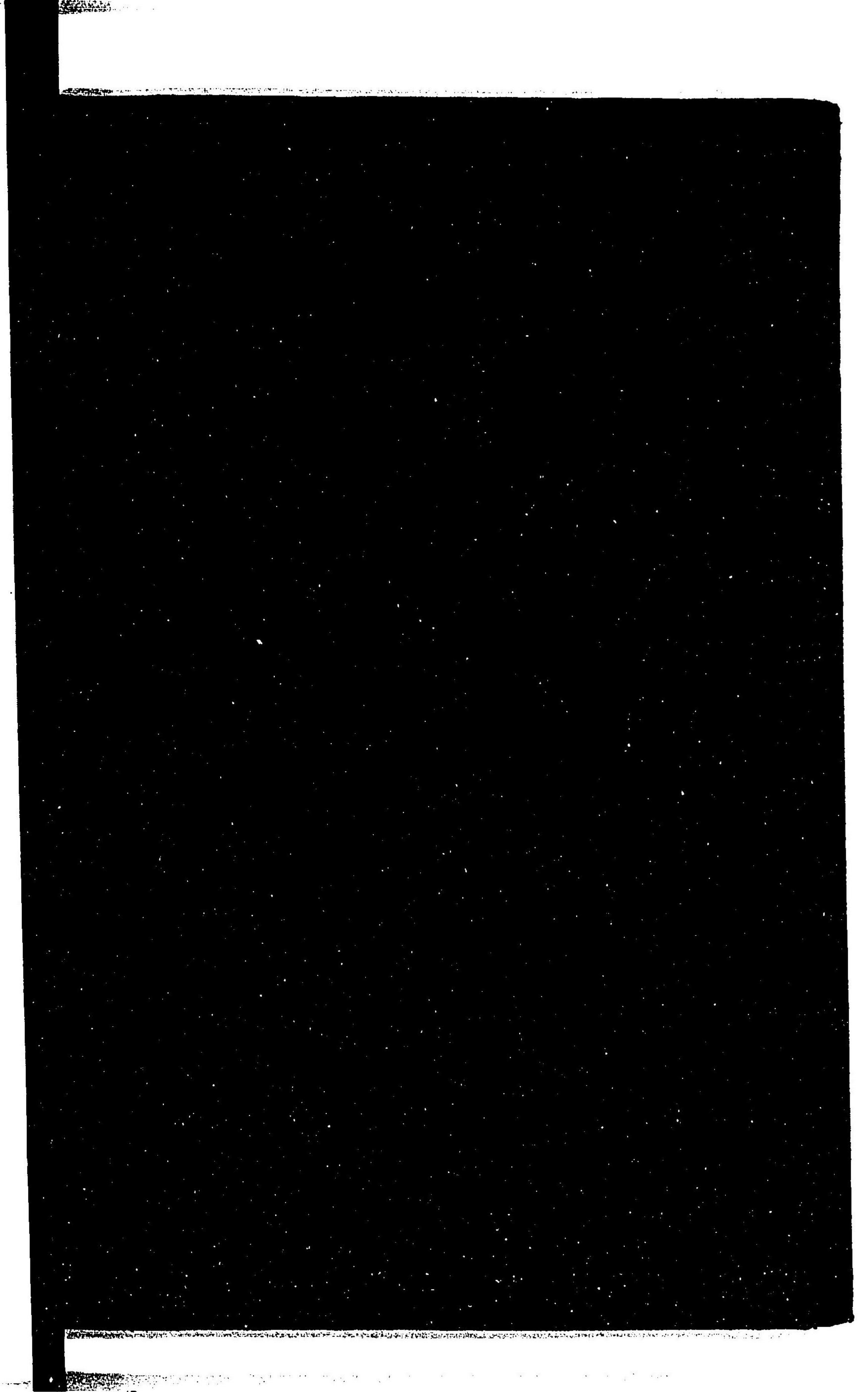
● 本文庫は内容の美紙質の精裝釘の麗と相俟つて最近の出版界に美し色彩を添ふ

各編判裝釘塊紙函入
紙數各冊千頁以上
正 價 各 冊 金 貳 圓
小包料各金拾六錢

—*(行發館文博)*—

25





(M)

022563-004-5

72-432

新撰名勝地誌

田山 花袋/編

卷4

M43-T3

ADB-0252



